

## 近代日本の文化人輩出過程に関する考察（1）：大正期生まれ伝統芸能家における家庭環境と学校教育の影響

著者	多賀 太
雑誌名	關西大學文學論集
巻	69
号	4
ページ	137-161
発行年	2020
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00020108">http://hdl.handle.net/10112/00020108</a>

# 近代日本の文化人輩出過程に関する考察（1）

## —大正期生まれ伝統芸能家における家庭環境と学校教育の影響—

多 賀 太

### 1. 問題の所在

本稿は、大正期生まれの伝統芸能家の自叙伝をもとに、彼らの輩出過程の特徴について、家庭環境および学校教育との関連を中心に明らかにしようとするものである。

近代化の進行は、直接的な身分世襲や財産相続に基づく社会的地位の再生産を後退させ、替わって学校教育と学歴取得を経由する学力主義的な選抜・配分原理を前景化させた。それゆえ、近代日本の教育—地位達成に関する歴史的研究は、学歴を媒介とした、官公庁や民間企業などの近代的セクターにおけるエリートの輩出過程を中心に進められてきた（麻生 2009など）。また、近代の家庭教育や家族の教育戦略に関する研究においては、主として身分世襲による職業的地位継承がかなわない新中間層に焦点が当てられてきた（沢山 1990, 広田 1999, 小針 2009など）。

しかし、近代化が進行してもなお、少なくとも公的には学力主義的な選抜を経ずに職業的地位達成が可能なエリート集団が存在する。その代表的な集団の1つが商家等の「旧中間層」であり、もう1つが、「文化人」として括られる芸能家、芸術家、文芸家たちである。

これらのうち、旧中間層出身経済エリートの輩出については、筆者自身が家族の教育戦略や学歴との関係ですでに検討を行っている。筆者らは、大正期生まれの経済エリートの自叙伝（日本経済新聞「私の履歴書」）をもとに、家庭教育や家族の教育戦略を旧中間層出身者と新中間層出身者の間で比較した。そ

の結果、新中間層では、天野郁夫（1983）のいう学歴の「地位形成機能」を意識した、学力主義的な選抜を通じた地位形成とそれを有利に進めようとする家族の教育戦略が広く見られた。それに対して、旧中間層では、天野のいう学歴の「地位表示機能」と結びついた、直接的な身分世襲を前提とした父親主導の教育戦略のもとで地位を誇示できる有名私学に進む傾向が顕著だった（多賀・山口 2016）。

一方、近代における「文化人」を含むエリートの輩出過程についても、いくつかの優れた研究が行われている。竹内洋（1999）は、学歴を基軸として、学者や文芸家なども含む近代エリートの教育経験と輩出過程を詳細に論じており、山内乾史（1995）は、近代以降の文芸エリート輩出過程について、出身地、出身階層、学歴を中心に体系的な分析を行っている。また、稲垣恭子・濱貴子（2013）は、近代以降の文化人を含む男性エリートの自叙伝の量的分析から「師弟関係」に関する詳細な傾向を明らかにしており、中村牧子（2018）は、文化人を含む各種エリートの輩出構造の特徴を、特に中等教育機会の地域差と地理的移動に着目しながら体系的に分析している。さらに、小山静子・太田素子ら（2008）は、本稿と同じく自叙伝を用いて、学校教育のみならず家庭教育にも注目しながら広い意味での人間形成という観点から近代エリートの輩出過程を論じている。

ただし、これらのいずれの研究においても、芸能家や芸術家については、全く触れられていないか、量的データの一部に含まれているのみで取り立てて分析されてはいない。また、小山・太田他（2008）と中村（2018）以外の研究では、家庭教育や家族の教育戦略についてもほとんど焦点が当てられていない。

したがって、近代における文化人の輩出過程に関する研究においては、文芸家以外の文化人、すなわち芸能家や芸術家などに焦点を当てることと、学校教育だけでなく親の教育意識・行動を含む家庭環境の影響をも視野に入れつつ、その過程を体系的に解明していくことが残された課題であるといえよう。

なお、本稿では大正期生まれの伝統芸能家の輩出過程を検討するが、筆者は、

同時代生まれの美術家・音楽家や大衆芸術家についても同様の分析を行って一定の知見を得ており、それらをいくつかの学会大会において口頭発表している（多賀 2018, 2019）。しかし、紙幅の制限によりそのすべてを本稿で述べることはできないため、美術家・音楽家や大衆芸術家の輩出過程の詳細については稿を改めて論じることとし、本稿では、伝統芸能家の輩出過程を中心に扱いつつ、その他の文化人に関する知見については、伝統芸能家との比較において言及するに留めておくこととしたい。

## 2. 分析方法

### 文化人の選定と類型化

対象とする自叙伝の選定、分類、分析は、以下の手順で行った。

第1に、対象とする自叙伝を選定した。2018年までに日本経済新聞社「私の履歴書」欄に自叙伝を執筆した全「文化人」のうち、まず、大正期生まれの作品のみを拾い出した<sup>1)</sup>。大正期生まれの人物の「私の履歴書」に限定したのは、同じく「私の履歴書」を対象としてすでに筆者らが分析を行っている同時代生まれの経済エリートの輩出過程と比較することで、文化人と経済人との違いを考察することが可能だからである。次に、すでに一定の研究が行われている文芸家と、学歴が地位達成に直結する学者、そして今回は宗教家とスポーツ選手も除いて、36人を選出した。さらに、36人の性別による内訳は、男性29人、女性7人であったことから、女性の分析は別の機会に行うこととし、今回は男性29人を第一次分析対象とした。

第2に、選出された29人の自叙伝を読み、次の観点に関わる記述を抜き出して1人1シートに記録していった<sup>2)</sup>。すなわち、①家族的背景（家族構成と出生順位／親の出自・職業／親の学歴／幼少期の暮らしぶり）、②家庭環境と家庭教育（当該職業に就くことに対する家族の意向／家庭教育の様子／当該職業達成への家庭環境の無意図的影響）、③学校教育（本人の学歴、学校教育に対する家族の意向、当該職業達成への公的教育課程およびそれ以外の学校生活の

影響), ④その他の特記事項である。

第3に、対象者ごとに前段の観点に関わる内容を要約して列挙した一覧表を作成し、それをもとに、類似するパターンを示した職業をグループ化していった。そうして、29人の対象者と彼らの職業を、次の3つの職業カテゴリーに分類した。すなわち、「伝統芸能家」(歌舞伎俳優、狂言師、茶道家、文楽三業、落語家)11人、「美術家・音楽家」(画家、彫刻家、造形家、クラシック音楽家)10人、「大衆芸術家」(俳優、映画監督、漫画家、写真家、料理人、ポピュラー音楽家)8人である。

第4に、3つの職業カテゴリーごとに一覧表を再構成し、彼らの輩出過程の特徴について、先の第2の手順で示した観点から検討を加え、職業カテゴリー相互の比較、ならびに筆者がすでに行っている同時代生まれの経済エリートに関する知見との比較考察を行った。

### 伝統芸能家の類型化と分析の観点

こうして導き出された3つの文化人カテゴリーのうち、本稿では、伝統芸能家に分類された11人(表1参照)の輩出過程について、次の観点から分析を

表1 分析対象の伝統芸能家と使用した「私の履歴書」の基本情報

氏名	肩書き (「私の履歴書」 連載時)	生年	没年月日	没年齢	「私の履歴書」 連載年・月	連載 回数 (日)	連載 開始 年齢
二代目 尾上松緑	歌舞伎俳優	1913 (大正2)	1989 (平成2)	76	1975年12月	25	62
五代目 柳家小さん	落語家	1915 (大正4)	2002 (平成14)	78	1984年2月	29	69
七代目 尾上梅幸	歌舞伎俳優	1915 (大正4)	1995 (平成7)	79	1979年3月	26	63
六代目 中村歌右衛門	歌舞伎俳優	1917 (大正6)	2001 (平成13)	84	1981年3月	29	64
初代 吉田玉男	文楽人形遣い	1919 (大正8)	2006 (平成18)	87	1991年9月	29	72
四世 茂山千作	狂言師	1919 (大正8)	2013 (平成25)	92	1994年10月	30	74
四代目 中村雀右衛門	歌舞伎俳優	1920 (大正9)	2012 (平成24)	91	1994年8月	30	73
十二世 小堀宗慶	遠州茶道宗家	1923 (大正12)	—	—	2006年8月	30	83
十五代 千宗室	裏千家家元	1923 (大正12)	—	—	1986年11月	29	63
七代目 竹本住大夫	文楽大夫	1924 (大正13)	2018 (平成30)	93	1999年10月	29	74
三代目 桂米朝	落語家	1925 (大正14)	2015 (平成27)	89	2001年11月	29	75

行った。

まず、同時代生まれの他の文化人カテゴリーと比較して親の職業を継いでいる者が多かったことから、親の職業を継いでいるか否か、継いでいるなら親の意向に沿った結果か否かという観点から、輩出過程の類型化を行った。その結果、「非世襲型」（文楽人形遣い1人、落語家2人）、「無意図的世襲型」（文楽大夫1人）、「意図的世襲型」（茶道家2人、狂言師1人、歌舞伎俳優4人）の3類型に分類された。

次に、それぞれの類型別に、生育環境、親の教育意識・行動、学校教育のそれぞれが職業達成といかに関連しているのか、あるいは関連していないのかを中心に検討していった。

さらに、伝統芸能家としての彼らの輩出が家族のもついかなる社会経済的基盤によって支えられていたのかを理解するうえで、P.ブルデューによる資本の3形態、すなわち「経済資本」「文化資本」「社会関係資本」の概念を補助線として用いた。ここでいう経済資本（economic capital）は直接お金に換算できる資産の形をとり、社会関係資本（social capital）は人間関係のネットワークの形をとる。そして、文化資本（cultural capital）はさらに3つの形態で存在しうる。すなわち、習慣化された振る舞いのような「身体化された形態」（the embodied state）、書物や絵画や道具などの「客体化された形態」（the objectified state）、学歴や資格のような「制度化された形態」（the institutionalized state）である。これらそれぞれの形態の資本は、一定の条件のもとで蓄積されたり継承されたりすることが可能であり、またこれらの諸形態は一定の条件のもとで互いに変換可能であるとされる（Bourdieu 1986）。

次節以降では、上記の観点に基づいて、伝統芸能家の輩出過程を類型別に記述していく。なお、芸能家のキャリアは、決して当該世界に入った時点で完成するものではなく、むしろその世界に入ってからいかに「芸をきわめていくか」が重要であろう。特に、人間国宝に認定されるほどの業績を上げるに至ったエリートたちの輩出過程の全容を明らかにするためには、キャリアの後半までを

視野に入れて分析する必要がある。また、今回対象とした大正期生まれの人々の中には、徴兵や戦争による混乱で一時期キャリアが途切れ、復員後に改めて当該職業で身を立てていく決意をしているケースもある。しかし本稿では、輩出過程における家庭教育と学校教育の影響に焦点を当てることから、当該芸能界に入るまでの人生の前半を中心に検討することにする。

### 3. 非世襲型の輩出過程

まず、親の職を継がない形で伝統芸能家になった文楽人形遣いの初代吉田玉男、落語家の三代目桂米朝、同じく落語家の五代目柳家小さんの3人の事例から見えていこう。

#### 初代吉田玉男

文楽人形遣いの初代吉田玉男（本名、上田末一）は、1919（大正8）年生まれ（2006年、87歳没）。1977年に重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定されたほか、勲四等旭日小綬章（1989年）、文化功労者（2000年）など数多くの受章・認定歴がある。

彼は、三男二女の末子として大阪市に生まれた。父は次々と仕事を変えていたが、彼が生まれたときには16歳上の長兄と8歳上の次兄が働いており、生活には比較的ゆとりがあったという。彼が生まれ育った日本橋5丁目には、当時文楽の人形遣いが多く住んでおり、両親や兄たちは人形遣いらと友人だったが、彼が13歳で文楽の道に進むことになるまで、家族の誰も文楽を見たことがなかった。

親の教育意識や家庭教育の様子に関して、彼は「親は無学だから『勉強せえ』などと言うわけもなく、した覚えもない」と述べている。しかし彼は、小学3年からそろばん塾に通い、その後は難波商工学校（小学校の施設を使った勤め人のための夜間学校）に通って、6年からは英語を、さらに尋常高等小学校に入ってから簿記を習っている。彼が、早く働きたいので夜に難波商工で勉強

を続けながら昼間は働くと言って高等小学校1年の終わりに学校を辞めようとした際には、母は「あと1年やないの、中退と卒業では、扱いにえらい差がつく」と言って退学を思いとどまらせようとしている。したがって彼の親は、学歴や各種資格が有する職業的有用性やそれらを通じた社会的上昇への関心がある程度有していたことがうかがえる。ただしそれは、結果的に彼が成功を遂げた文楽界での職業達成とは異なる将来を見据えてのことであった。

その後彼は、自らの意思で高等小学校を中退して13歳で会社に務めるが、学歴による待遇の差を実感し、手に職を付けた方がよいと考え直す。そして、それを知った両親が、彼を文楽の人形遣いにさせようと思いつき、彼は、会社勤めを続けながら、日曜毎に知り合いの人形遣いに連れられて文楽座に通いはじめる。そして、1933（昭和8）年に吉田玉次郎に弟子入りして、文楽の世界に入ることになるのである。

彼の場合、経済資本に非常に恵まれていたわけではなく、文楽の世界に入る直前まで文楽を見たことさえなかったという点で、当該芸能に関する文化資本継承の機会にも恵まれなかったが、人形遣いが多く住む地域で生まれ育ち、家族が彼らと懇意にしていたという社会関係資本が、彼の職業達成に寄与している様子がうかがえる。

### 三代目桂米朝

落語家の三代目桂米朝（本名、中川清）は、1925（大正14）年生まれ（2015年、89歳没）。1996年、次に紹介する5代目柳家小さんに続いて落語界で2人目の重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定され、2009年には落語界初の文化勲章を受けている。

彼の家は、祖父の代から姫路の神社で神職を務めていた。彼の父は、いずれは神職の跡を継ぐ条件で郵便局に就職して中国で勤務しており、彼は、当時関東州と呼ばれていた中国の大連で生まれた。兄と姉がいたが、彼が生まれる前に夭逝しており、彼は長男のように育てられた。そして、彼が小学校に入る前



に祖父が亡くなり、父が神社を引き継ぐため、前年に生まれた弟を含む一家で姫路に戻ってきた。

落語家としての彼の輩出過程においては、圧倒的に父親の影響が大きいことがうかがえる。彼は、小学3、4年生の頃に読書に熱中するようになり、すぐに童話では飽き足らず『落語全集』のとりこになったことを父の影響だと述べている。父の唯一の道楽が寄席や芝居の見物で、小学2年の時から小学6年で父が亡くなるまで、姫路から大阪や京都まで寄席や芝居小屋に連れて行ってもらっていた。また自宅でも、ラジオで落語や講談の番組が流れる時間になると、ラジオの前に敷いた座布団に座って父と一緒に聞いていた。

彼が小学6年のときに父が病気で亡くなり、もう寄席に行くことはできなくなったが、中学生になっても彼の落語への興味は衰えるどころかますます高じていき、雑誌で落語界の消息を知り、ラジオで落語を楽しみながら、古書店で見つけた落語の研究書なども読み進めた。そして上京後は、寄席研究家作家の正岡容いるるに師事している。

彼は自叙伝で、小学6年のときから成績が非常によかったと述べており、旧制姫路中学を経て大東文化学院（その後の大東文化大学）に進学している。学校教育に関する父や母の意向については言及していないが、父の死後に父親代わりとなった叔父からは、大学進学の際に「神主は神宮皇学館か国学院だ。どちらかにしろ。」と言われている。氏子たちも彼が神社を継ぐものだと決めてかかっており、母もそのことを自明視していた。結局、「家を出て東京に行ければ、その間は神社から逃れて、誰に気兼ねすることなく寄席や講積場をはしごできる」と考え、親戚には「国学院を受ける」と言ってお京し、漢学教育を主体とする大東文化学院に入学している。

その後は、19歳の時に学徒動員で徴兵され、大東文化学院はそのまま中退している。戦後に復員してからも「落語を忘れたことは」なかったという彼は、正岡容のような伝統芸能・演芸の研究家を目指そうとも考えたが、「自分も高座に上がりたい」という気持ちが強くなり、1947年に4代目桂米團治に入門。

サラリーマンをしながら稽古に励んでいた。一時期、叔父から母の面倒を見るように言われて姫路で郵便局に勤めていたが、1951年に師匠の米團治が亡くなったことにより、落語で身を立てることを決心している。

彼の事例からは、父が趣味として蓄積していた落語に関する文化資本が小学生のときに継承されており、中学生になってからの自らの落語に関する興味の高まりがさらなる文化資本の蓄積をもたらして、後の職業達成に繋がっている様子がうかがえる。

### 五代目柳家小さん

落語家の五代目柳家小さん（本名、小林盛夫）は、1915（大正4）年生まれ（2002年、78歳没）。紫綬褒章（1980年）、勲四等旭日小綬章（1985年）などの受章を重ね、1995年に落語界初となる重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定されている。

彼は、長野市で4人きょうだいの末子として生まれた。父が商売に失敗し、彼の幼少期に家族で東京へ引っ越して新しい商売を始めたが、やはりうまくいかず、母も内職をしていた。彼が小学3年から6年の半ばまでは「貧乏のどん底」であり、その間に兄とすぐ上の姉は10歳代で病死している。その後、父が丸の内の弁護士事務所に住み込みの事務職に就くことができ、ようやく貧困から脱出することができた。学校教育に関する親の意向についての言及は見られないが、貧困から抜け出せたおかげで、彼は高等小学校に進学、その後さらに東京市立商業学校夜間部に入学している。

自叙伝によれば、彼の職業選択には少なくとも3回の岐路があり、落語家になろうと思いつ前に、2つの職業を考えていた。まず、商業学校夜間部時代には、画家になろうと考えて昼間には絵の勉強をしていた。ところが、突然父が脳出血で亡くなり、父が働いていた弁護士事務所でも母が下働きをすることになったことから、彼も学校を辞めて給仕として事務所に入り、絵で身を立てることは諦めざるを得なくなった。そこで次に、高等小学校進学以り組んで来

た剣道で身を立てようと道場に通ったが、身を入れすぎて体を壊し、医者から剣道を辞めるよう言われ、これも断念せざるを得なくなった。

その頃彼は、弁護士事務所の弁護士に連れられて寄席に通ううちに、すっかり落語好きになっていた。そして、病床で自分の将来について思案しているうちに落語家になろうと思ひ立ち、母には内緒で4代目柳家小さんに入門した。しばらくして母に打ち明けると、母からは「冗談じゃない。噺家なんて絶対駄目だ」と涙を流して反対され、姉や義兄からも「そんなものになるなら、兄弟の縁を切る」と言われたが、事務所の弁護士に相談して母を説得してもらい、18歳のときに内弟子ではなく通いの形で母の手伝いをしながら前座見習いの生活を始め、落語家としてのキャリアをスタートさせている。

彼の事例では、住み込みで働かせてもらっていた弁護士との人間関係を通して落語の世界を知り、その弁護士に母や親族を説得してもらっている点で、社会関係資本の効果があったと言えなくもない。しかし、少なくとも家族の保有していた各種「資本」が当該職業達成に大きな影響を与えている様子はほとんどかがえない。

#### 4. 無意図的世襲型の輩出過程

##### 七代目竹本住大夫

次に、唯一の無意図的世襲型に分類された、文楽大夫の七代目竹本住大夫の事例を見ていこう。彼は、1924（大正13）年、大阪市生まれ（2018年、93歳没）。本名を岸本欣一という。1989（平成元）年に重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定され、文化功労賞（2005年）や文化勲章（2014年）など多くの受賞歴をもつ。

欣一は、出生と同時に、子どもがいなかった実母の姉とその夫である六代目竹本住大夫（本名、岸本吟治）夫妻のもとに養子に出されており、本人は自叙伝で吟治夫妻を「父」「母」と呼んでいる（以下、父・母は吟治夫妻を指す）。

父は、欣一が子どもの頃は彼を文楽の道に進ませようとは思っていなかつ

た。また、煙草屋やお茶屋をして家族の生活を支えていた母は、彼に対して常々「商売人になって金もうけせなあかん」と言っていた。元芸者だった母は、「芸人は金にならないということをずっと見てきた」のだという。

こうした彼の両親の考えは、欣一の学歴にもそのまま反映されている。彼は、中学進学の際に、母の意向を受けて一旦大阪商業学校に入学している。しかし、彼は商売に関心がなく、野球好きであったことから、途中で野球の盛んな浪華商業学校に編入する。その後、1941（昭和16）年に繰り上げ卒業となり、文楽の道に進もうと考えていた彼に対して、母は、兵役が免除されるとしてさらに大学進学を勧め、彼を日本大学大阪専門学校（戦後の近畿大学）に入学させている。彼によれば、母が彼を大学まで行かせたのは、「堅気の職業に就かせなかったから」だという。結局、大学も1944（昭和19）年に繰り上げ卒業となり、彼はその3か月後に徴兵されている。

欣一が文楽の道に進むことを決意したのは、1946（昭和21）年の復員直後である。母は強く反対したが、彼の意思は堅く、それまで反対してきた父も、戦後の混乱期で大学を出たからといって簡単に仕事が見つかるわけではないとして了承した。そして、自分の手元に置くと欣一を甘やかしてしまうからと、彼を当時の二代目豊竹古靱太夫（後の豊竹山城少掾）に入門させている。

両親とも彼を文楽の道に進ませようとはしなかったのに、なぜ彼は頑ままでに文楽の道に進もうとしてきたのか。これについては、幼少期からの様々な経験を通して、文楽の文化資本が彼に継承され蓄積されていたことが影響していると考えられる。

彼が生まれ育った大阪の北新地では、当時「花街と文楽が溶け合っ」ており、「裏の道までびっしりお茶屋さんが並び、昼から三味線がそこそこで聞こえていた。そうした近隣をうろつきながら「三味線や唄（うた）や浄瑠璃を子守歌に育」ったという。ちなみに、彼が「叔父さん」と呼んで付き合ってきた彼の実父も、そして祖父も、文楽の三味線弾きであった。

また、両親は、欣一を芸の道に進ませたくなかったというものの、遅くとも

幼稚園の頃から文楽を見に連れて行っており、彼は帰ってくるなり「チャブ台に絵本を立てて、むちゃくちゃな節をつけて『文楽ごっこ』をやっていた」という。そして、家で父が稽古する声が自然に耳に入ってくる生活を送るうち、「意味はわからなくてもつい口ずさむ」ようになり、小学4年の頃には父に「ちゃんと教えて」と頼んで「区切りのいいとこまで」稽古をつけてもらっている。また母も、お茶屋の女将として三味線を弾いており、欣一に端唄を教えたりしている。

彼の場合、家族は決して裕福ではなく、経済資本にはそれほど恵まれていなかったが、父が文楽の大夫であることを基点とする生活環境を通して文化資本の継承が着実に行われていた。また、適格な指導者入門させるなど、父の社会関係資本も彼の職業達成に大きく寄与していたと考えられる。

#### 5. 意図的世襲型の輩出過程その1—茶道家

これまでに見てきた4人以外の7人は、いずれも、当初から親が息子に父親の職を継がせることを意図した家庭教育を施し、結果的に息子が親の職業を継いでいる事例である。しかし、彼らのなかでも、親の学校教育への意識は異なっている。まず、当該職業達成に対する学校教育の意義を親が比較的意識していたと思われる2つの事例から見よう。

### 第十五代千宗室

裏千家家元の第十五代千宗室<sup>3)</sup>(本名、千政興)は、1923(大正12)年、後に第14代千宗室を名乗る裏千家若宗匠十四世淡々斎を父として京都に生まれた。1977年に茶道界で初の文化勲章を受章するなど、数多くの賞を受賞している。

政興は、5人きょうだい(姉2人、弟2人)の長男として、父の跡を継ぐことを前提に育てられた。小学校入学前の数えの6歳6月6日に稽古始めが行われ、家元である父親から初めてお点前の手ほどきを受けている。小学校に入学

すると、お茶以外に、習字と小舞の稽古も始まった。中学生になって、周りの友人たちが様々な人生の志望に向かって勉強し始める頃には、自分には「1つの道しかないことは自覚して」いたという。

しつけをはじめとする家庭教育も、跡継ぎであることを意識した厳しいものであった。父は、しつけや教育を「母にゆだねておいて、その母を上手にコントロールして」いた。その母の教育方法は「スパルタ」式で、たとえば、弟たちが悪さをしても、母は跡継ぎである政興を怒ったという。

政興は、京都師範附属小学校から同志社中学に進み、最終的に同志社大学法経学部を卒業しているが、そうした進路形成には父親の意向が強く働いている。同志社の創設者である新島襄の妻八重子が、政興の祖父である円能斎のお茶の弟子であり、新島も妻とともにお茶会に出ていた縁で、父は同志社で学んでいた。政興は、友人たちと府立一中や三中に行きたかったが、父は「私の学んだ後を学ばよろしい」として彼を同志社中学に行かせている。これについて彼は、「自然にキリスト教の内容が身についたが、後になってこれが非常に役立った」と述べている。さらに、大学進学時に政興は、東京の別の大学に進みたかったが、「遊学している間に、父の下にいて身につけなければならないことがたくさんある」として親の許可が得られず、同志社の大学予科に入学している。本科への進学に際しては、彼自身の意思で経済を専攻しているが、父は「考古学や歴史学をやったらいい」と勧めたという。

彼の場合、父の跡を継ぐことは自明であり、そのために学歴を必要とするわけではないが、彼の父は、茶道家としての職業達成において、学校教育に何らかの意義を見出していた様子うかがえる。

## 小堀宗慶

遠州流茶道宗家十二世小堀宗慶（本名、小堀正明）は、1923（大正12）年、十一世小堀宗明（本名、小堀正徳）の長男として東京で生まれた。造園や建築、花道、香道、書道、日本画など、幅広い芸術・工芸分野に優れ、1993年には勲

四等旭日小綬章を受章している。

彼もまた、生まれたときから父の跡を継ぐことは自明であった。茶道、香道、花道などすべが巧みで「身びいきを差し引いても万能のスーパーウーマンだった」という母から、「あなたのご先祖様の小堀遠州公は、文化的、芸術的に日本の歴史に名を残した偉い人。あなたはその跡を継がなくてはならないのです」と諭されながら厳しく教育されてきた。食事の時に箸は一寸以上汚してはならないとしつけられ、メンコやベーゴマ、紙芝居などは「悪い遊び」で「ばれると必ずお目玉を食った」。勝負事も厳禁だった。

他方、父からは「何をしろ、何をしてはいけない、などということは一切、言われた記憶がな」く、父の教育方法は、「子どもに対しては黙って見守り、自分の行いをもってその関心や興味を促し、いろいろな能力をおのずと引き出す」という「今思えば理想的な教育」だったという。彼は、父が正月に書き初めをする姿や、家の蔵に書の手本である書帖が高く積まれていたのを見て書に興味を持ったことに言及している。父は、東京美術学校の彫像科で学び、茶室や母屋、庭などの設計や造作に「並々ならぬ才と見識を持って」いた。彼は幼少期に、後に移り住むことになる、父が設計した青山の新居の建築現場を見に行くのが楽しみだったという。

彼の学歴にも、やはり父の意向が大きく働いている。中学進学の際には慶應や学習院を考えていたが、父は「軍人の学校がいい」として、海軍の退役軍人が多く教師を務め、スパルタ式の教育を行う旧制海城中学に彼を入学させている。卒業後の受験に際しては、両親は彼のしたいようにさせてくれたが、いくつかの試験に失敗し、遠州茶道宗家を継ぐためにどのような道がふさわしいかと父に相談したところ、父は「日本の文化、芸術を学ぶことが有益なのではないか」として、自身の母校でもある東京美術学校を勧めている。そして彼が受験を決心すると、父は親交のあった先生に彼の指導を依頼し、無事彼は日本画科に入学している。

彼の事例においても、先述の千宗室と同様、職業的地位形成に学歴が必ずし



も必要ではないものの、父が職業達成に対する学校教育の意義をある程度見出して進路選択させている様子がうかがえる。

## 6. 意図的世襲型の輩出過程その2—狂言師と歌舞伎俳優

最後に、当初から親が息子に父親の職を継がせることを意図した家庭教育を施し、結果的に息子が親の職業を継いでいる事例のなかで、親がほとんど学校教育を重視していないタイプとして、狂言師1人と歌舞伎俳優4人の事例を見ていこう。

### 四世茂山千作

狂言師の四世茂山千作（本名、茂山<sup>しめ</sup>七五三）は、1919（大正8）年、京都市生まれ（2013年、92歳没）。1989年に重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された他、2007年には狂言界初の文化勲章を受章するなど、多くの受賞がある。

彼は、狂言を生業とする茂山家で、後に三世茂山千作を名乗る父、茂山真一と、金剛流能楽師の長女であった母、すがとの間に、5人きょうだいの長男として生まれた。幼い頃から「七五三は長男やから、いずれ茂山の家を継ぐんやで」と言い聞かされ、それが当然と思っていたという。後に二世茂山千作を名乗る事実上の祖父（父の養父）も一緒に暮らしており、跡継ぎである彼に対する「祖父母のかわいがり方は大変なもので、両親に触らせないで、自分たちで育てた」という。

その一方で、祖父は狂言の稽古においては非常に厳しかった。3歳の頃から、狂言の言葉を復唱する「口写し」の稽古が祖父によって始められ、満4歳で初舞台を踏んでいる。小学生になって舞台出演が増えてくると、稽古はがぜん厳しくなり、だらだらしていると蔵の中に入れられたり、仏壇の前で1～2時間座らされたりもした。そうするうち、小学生の間に30～40くらいの狂言を覚えていた。小学校卒業後に一旦進学した京都市立美術工芸学校を中退した後



は、謡、鼓、笛、太鼓など、狂言師の素養になるとされる技芸のそれぞれを、当時の京都能楽界の一流と言われる人たちのもとで習っている。

彼の家庭では、職業達成に対する学校教育の意義はほとんど意識されていなかったようである。彼の祖父は、当時の大方の能楽師たちと同じく「学校なんかいらへん。狂言さえ上手やったらええ」という考えだった。一方父は、自身が病弱で進学をあきらめたこともあって、「七五三には中学校くらいは出してやりたい」と願っていたという。それで、京都市立美術工芸学校の日本画科へ進学したものの、結局は、絵描きになるわけでもないのだから狂言に専念した方がよいだろうとのことで、3年で中退している。

#### 歌舞伎俳優4人のプロフィール

続いて、歌舞伎俳優の事例について見ていこう。今回対象とした4人とも比較的似たような輩出過程をたどっているのだから、以下では4人の事例を合わせて見ていきたい。まず、彼らの簡単なプロフィールを以下に記す。

二代目尾上松緑（本名、藤間豊）は、1913（大正2）年、東京日本橋の生まれ（1989年、76歳没）。父は七代目松本幸四郎（本名、藤間金太郎）である。5人きょうだい（兄2人、妹2人）の三男で、兄は十一代目市川團十郎と八代目松本幸四郎である。1972年に重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定され、文化勲章（1987年）など多くの賞を受けている。

七代目尾上梅幸（本名、寺島誠三）は、1915（大正4）年、東京生まれ（1995年、79歳没）。生まれる前から養父である六代目尾上菊五郎夫妻（寺島家）の養子に出されることが決まっており、芝公園の寺島家で菊五郎夫妻に育てられた。1968年に重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定され、1994年には文化功労者にも認定されている。

六代目中村歌右衛門（本名、河村藤雄）は、1917（大正6）年、東京千駄ヶ谷の生まれ（2001年、84歳没）。父は五代目中村歌右衛門（本名、中村栄次郎）である。2人兄弟の次男で、兄は五代目中村福助。1968年に重要無形文化財保

持者（人間国宝）に認定された他、1979年に文化勲章を、1996年には芸能界初の勲一等瑞宝章を受けている。

四代目中村雀右衛門（本名、青木清治）は、1920（大正9）年、東京上野の生まれ（2012年、91歳没）。六代目大谷友右衛門のもと、2人きょうだいの次男に生まれる。1991年に重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された他、文化勲章（2004年）など、多くの受賞がある。

### 当該職業に向けた家族による職業教育

上述のように、歌舞伎俳優の4人はみな歌舞伎俳優を父（養父を含む）に持ち、物心ついた頃には父の跡を継いで歌舞伎俳優になることが当然とされる環境で育っている。そのことについて、歌右衛門は「生まれながらにして役者に生まれついたような気がしてなりません」と表現し、雀右衛門は「こどものころから芝居が好きで、歌舞伎役者としての人生以外ほとんど考えたことがない」と述べている。数えの6歳で初舞台を踏むときに役者になるのがいやでしょうがなかったという松緑も、後に「私には歌舞伎を勉強していかなければならない宿命がある」と記している。

歌舞伎などの伝統芸能の世界では、初稽古を6歳の6月6日に始めるというしきたりがあり、4人とも5～6歳で正式に稽古を始めて間もなく初舞台を踏んでいる。彼らもまた、先述の茂山千作と同様、親や祖父から徹底した指導を受けたことを記している。松緑は、「ふだんはやさしい好々爺」だった祖父が、「踊りのけいこになると人が変わったようにこわくな」り、「いつもムチを持っていて、ちょっとでもまちがえるとビシリとくる。何かの拍子にちょっと祖父の顔を見ようものなら『おれの顔に踊りが書いてあるか！』とどなられる」と記している。梅幸は、10歳のときの父の徹底的な指導の例として、雪の中を歩く役の演技方が何度やっても駄目だと言われ、最後は雪の積もった庭に裸足で放り出されて延々と歩かされ、ようやく上手く演じられたらすかさずぎゅっと抱きしめてくれたというエピソードを記している。

また彼らは、別の師のところに預けられて指導されたり、技芸ごとに異なる専門家のもとで教えを受けたりもしている。松緑は、「自身にない芸風を身につけさせようとした」という父によって、14歳のときに梅幸の養父である六代目尾上菊五郎の家に預けられ、その後は菊五郎の「卓越した教え方」の「スパルタ教育」によって指導されている。歌右衛門は、父は「役者教育については自分は口を出さないで一流の先生にお預けして教育していただく、という考え」であり、「歌舞伎についてもいろいろな芸事についても、具体的なことを父から教わった記憶は」なく、「義太夫、長唄、お囃子、常磐津、清元、習字など、いずれの師匠も子どもにはもったいないような一流の人」だったと記している。梅幸や雀右衛門も、学校が始まる前や学校が終わった後、そして舞台が終わった後にも、踊り、三味線、鳴り物などあれこれと稽古に通ったことを記している。

#### 学歴と学校教育に対する家族と本人の意識

親の学歴については、歌舞伎俳優の4人とも言及していない。この理由は、後に述べるように、彼らの親世代の歌舞伎俳優とその妻の多くは義務教育しか受けておらず、そうでなくても職業達成において学歴がほとんど必要とされていないため、親の学歴にあえて言及する必要がなかったのだと推測される。

彼ら自身の学歴について見てみよう。松緑、歌右衛門、雀右衛門の3人は、初等教育で学業を終えている。ただし、松緑は小学校入学から、雀右衛門は小学4年終了後に、私立暁星小学校で学んでおり、梅幸も小学校は暁星である。これらのことから、初等教育段階ではあるものの、彼らの親たちの間で「学歴の地位表示機能」（天野 1983）が意識されていたことは考えられる。

また、梅幸は小学校卒業後慶應商工に進んでおり、歌右衛門は、学歴的には尋常小学校卒だが、その後約3年間、自宅で家庭教師について中学の課程を一通り習っている。また、雀右衛門は、暁星で中等科に進むことができたのに初

等科だけで退学しており、「当時の役者の子どもはだいたいそんなものでよしとされていた」と述べているが、彼の母親は後々までこの退学を残念がっている。これらのことから、この当時、職業達成において学歴が不要である歌舞伎の世界でも、少なくとも中等教育までは受けさせたいという親の教育意識が広がりつつあったと考えられる。

とはいえ、親たちが歌舞伎俳優としての成功に学校教育が何らかの積極的な役割を果たすと考えていた様子は、彼らの記述からはうかがえない。雀右衛門は、小学4年のときに暁星に編入しているが、これは「英語をやってRとLをうまく発音できるようになってしまうと、浄瑠璃や歌舞伎のせりふがうまくいえなくなる」と考えた父が、英語ではなくフランス語を教える暁星に彼を行かせたという、むしろ消極的な理由からの学校選択の一例である。

### 幼少期の暮らしぶり

歌舞伎俳優の4人はいずれも、幼少期から非常に裕福な生活をしていたことがうかがえる。たとえば歌右衛門は、三千坪の敷地に建てられた総平屋約二百坪の家に父母と兄と彼の4人で住み、敷地内の長屋には22～3人の使用人が住んでいた。夏には伊香保の別荘に避暑に行っていた。松緑も、祖父、父母、きょうだい5人以外に、彼専属の「ばあや」と女中と使用人5人で大屋敷に住んでいたという。雀右衛門も「考えられないほどの広い屋敷」に住み、移動は人力車がクラシックカーだった。梅幸も「敷地五百坪、建坪百坪あまりの和風造りの平屋」で家族以外に5人の使用人が住んでおり、敷地内に2つあった蔵には、祖父（五代目菊五郎）や父が使った芝居の衣装や書き抜き類、書画骨董類などが保管されていたという。

こうした様子からは、彼らの歌舞伎に関わる文化資本の継承は、家族のもつ豊かな経済資本、そして「客体化された形態」での文化資本の所有によっても支えられてきたことがうかがえる。

## 7. 結論と課題

### 結果のまとめ

以上、「私の履歴書」に掲載された自叙伝を資料として、大正期生まれの伝統芸能家の中でも、人間国宝に認定されたりそれに優るとも劣らない評価を得たエリート文化人たちの輩出過程を確認してきた。その際、親の職を継いでいるか、継いでいるなら親の意向に沿った結果なのかという観点からそれらを類型化したうえで、彼らの生育環境、親の教育意識・行動、学校教育について、当該職業達成との関係で検討した。さらに、伝統芸能家としての彼らの輩出を支えた基盤について、ブルデューによる「経済資本」「文化資本」「社会関係資本」の概念に依拠して考察を加えた。

第1に、文楽人形遣いの初代吉田玉男、落語家の三代目桂米朝、五代目柳家小さんの3人は、親の職を継がない形で伝統芸能家になった「非世襲型」に分類された。ただし、彼らの伝統芸能家としての輩出を支えたと考えられる基盤は、それぞれ異なっていた。三代目桂米朝は、彼が小学6年生のときに亡くなった父と過ごすなかで落語に関わる文化資本を受け継いでいた。初代吉田玉男の場合は、幼少期に文楽に関する文化資本を継承する機会には恵まれなかったが、人形遣いが多く住む地域で生まれ育ち、家族が彼らと親しくしていたという社会関係資本のおかげで文楽の世界に首尾良く入ることができていた。一方、五代目柳家小さんの場合は、18歳で落語家を志すまで、家族が保有する文化資本や社会関係資本が職業達成に寄与した様子はいかがえなかった。

第2に、文楽大夫の七代目竹本住大夫は、対象者のなかでただ一人、親は自分の職を継がせるつもりなく育てたが結果的に息子が跡を継いだ「無意図的世襲型」に分類された。彼の家族はあまり裕福ではなく、経済資本にはそれほど恵まれていなかったが、父が文楽の大夫であるという家庭環境や、父は息子を文楽の世界に入れるつもりはなかったにもかかわらず息子にせがまれて公演に連れて行ったり節を教えたりすることを通して文化資本の継承が行われてい

た。また、彼が文楽の世界に入ることを承諾するやいなや父は彼を別の大夫に師事させているように、父の社会関係資本も彼の職業達成に大きく寄与していた。

第3に、上記以外の7人（茶道家の遠州流十二世小堀宗慶、裏千家第十五代千宗室、狂言師の四世茂山千作、歌舞伎俳優の二代目尾上松緑、七代目尾上梅幸、六代目中村歌右衛門、四代目中村雀右衛門）のケースは、家族が当初から息子に父の職業を継がせることを意図して幼少期から徹底的な職業教育を施しており、「意図的世襲型」に分類された。彼らの場合、半ば職業教育と融合した家庭生活において、親や親族である前に「師」である父や祖父が、自ら身体化した文化資本としての技芸や立ち居振る舞いを、日々の稽古やしつけを通して息子たちに継承させていた。また、父や母が教えるだけでなく技芸ごとに異なる一流の指導者のもとで学ばせたり、あえて父ではなく別の指導者に師事させるなどの事例からも、そうした文化資本の蓄積において親の社会関係資本が活かされていることがうかがえた。さらに、彼らの幼少期の暮らしぶりは非常に裕福であることから、こうした形での文化資本の蓄積は、彼らの家族の豊かな経済資本によっても支えられていたといえるだろう。

### 学校教育の職業的意義の低さ

このように、伝統芸能エリートとしての彼らは、公的教育システムとはほぼ独立した当該芸能界内部での独自の教育システムのもとで輩出されていた。そこで、こうした彼らの輩出過程の特徴について、特に学校教育との関連で、「私の履歴書」を執筆した同時代生まれの経済エリートおよび他の種類の文化エリート（美術家・音楽家および大衆芸術家）の輩出過程と比較考察してみよう。

経済エリートや他の文化エリートと比較した場合の伝統芸能エリートの輩出過程の特徴として、学校教育のもつ職業的意義が極めて低いことが指摘できる。まず第1に、伝統芸能エリートたちの学歴の相対的な低さを指摘することができる。新中間層出身の経済エリートのほとんどは東京大学をはじめ帝国大

学や官立大学の法学部か経済学部を卒業しており、旧中間層出身の経済エリートも多くは私立大学を含む高等教育を受けていた（多賀・山口 2016）。また、美術家・音楽家の大半は美術学校や音楽学校など職業に直結する中等・高等教育を受け、大衆芸術家もほとんどは中等・高等教育を受けていた（多賀 2019）。それに対して、今回対象とした伝統芸能家11人の最終学歴の内訳をみると、4人は初等教育まで、3人が中等教育終了または中退で、高等教育に進んだのは、茶道家2人を含む大正12年から14年生まれの4人のみ、しかもちょうど戦局の激化もあって大学卒は1人だけである。また、親の学歴についても、言及が見られるのは茶道家の2人で、それ以外の9人は親の学歴に全く触れていない。このことは、自叙伝の書き手である対象者たちが、親の学歴が低いためあえて触れる必要がないと考えたか、あるいはそもそも親の学歴が自分の人生においてもつ意義を重視していなかったかのいずれかであると考えられる。

第2に、ほとんどの事例において、彼らの親や家族が当該職業達成に対して学校教育に何かを期待していた記述がほとんど見られなかった。確かに、世襲を前提としていたり、学校教育とは独立した独自の養成システムを擁する伝統芸能界においては、新中間層出身の官公庁や民間セクターにおけるエリートのように、学歴に「地位形成機能」を求めないし求めることもできないのだから、親が学校教育に関心を示さないことは当然かもしれない。ただし、筆者が旧中間層出身の経済エリートの輩出過程において指摘したように、息子に跡を継がせようとする世襲の企業経営者であっても、学校教育に職業的意義を見出して積極的に息子に進路指南を行っていた事例は少なくない（多賀・山口 2016）。ところが、伝統芸能家たちの記述からは、茶道家の2人のケースを除いて、当該職業に関して親が学校教育に期待していた様子はほとんどうかがえず、むしろ言及されていたのは、当該職業に就くことを望まない親からの、商売や神職といった他の仕事に就くための進学指南であった。

第3に、伝統芸能家たち自身も、学校の公的な教育課程かそれ以外の学校生活を問わず、学校教育や学校生活が当該職業達成に影響を与えたとの認識を



ほとんど示していなかった。美術家・音楽家や大衆芸術家の中には、美術や音楽といった学校の授業や、部活や大学のサークルなど学校での非公式の活動が当該職業への関心やそのスキルの形成に意義を有していたことに言及している者が少なくなかった（多賀 2019）。しかし、今回対象とした伝統芸能家においては、そうした記述はほぼ皆無であった。

### 今後の課題

当面の課題としては、冒頭にも述べたように、すでに一定の分析を終えている同時代生まれの美術家・音楽家や大衆芸術家についての知見を論文化することと、今回の分析対象から除外した女性文化人の輩出過程を分析することが挙げられるが、それらに加えて、本稿で対象とした伝統芸能家に関するさらなる研究課題を1点挙げておきたい。

本稿では、大正期生まれの伝統芸能家に限定して検討を行ったが、この対象をより若い世代に広げて同一の「界」における輩出過程の時代別比較を行いたい。先述のように、世襲を基本とする狂言師や歌舞伎俳優においては、親や親族による学歴軽視傾向が見られたが、そうしたなかでも、世代が若くなるにつれて、少しずつ学歴への関心が高まっていることをうかがわせる記述もいくつか見られた。たとえば、四世茂山千作は、祖父は狂言さえ上手ければ学校には行かなくてもよいと考えていたが、父は息子には中学校くらいは行かせてやりたいと願っていたことに触れている。また、四代目中村雀右衛門は、後の八代目中村友右衛門である長男の教育について、「高等教育を受けることなど親にできなかったことをこどもにさせたいという気持ちもあったので、自由にさせておいた」と述べている。学校教育の職業的意義の程度が低く、学校教育から極めて独立した独自の職業養成システムを確立しているこれらの「界」において、学校教育や学歴に対する親の意識、さらには学校教育が彼らの職業達成や社会的威信にもたらす影響が時代とともにどう変化しているのか、あるいは変化していないのかを明らかにしていくことは、学歴と学校教育の潜在的な機能



の解明において意義ある作業であると思われる。

## 注

- 1) 人材の輩出過程を分析するための資料として自叙伝を用いることの利点と限界、ならびに「私の履歴書」の概要と特徴については、多賀（2014）を参照されたい。
- 2) 参照した自叙伝のテキストに関して、日本経済新聞社「私の履歴書 文化人シリーズ」に自叙伝が収録されている人物については同シリーズの書籍を使用し、それ以外の人物については『日本経済新聞縮刷版』で掲載当時の紙面（1人が約1か月間ほぼ毎日約30回を連載）の全該当ページをコピーしたものを使用した。
- 3) 彼は、2002年の長男による家元継承以降、千玄室を名乗っているが、本稿では自叙伝執筆時の名をそのまま用いて記述する。

## 参考文献

- 天野郁夫 1983「学歴の地位形成機能と地位表示機能」『教育社会学研究』38, 44-49頁
- 麻生誠 2009『日本の学歴エリート』講談社
- Bourdieu, Pierre, 1986, "The Forms of Capital," John G. Richardson ed. *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education*, Greenwood Press, 241-258.
- 広田照幸 1999『日本人のしつけは衰退したか』講談社
- 稲垣恭子・濱貴子 2013「財界人・文化人の『師弟関係』—『私の履歴書』の分析から—」『京都大学大学院教育学研究科紀要』59, 1-23頁
- 小針誠 2009『〈お受験〉の社会史—都市新中間層と私立小学校』世織書房
- 小山静子・太田素子編 2008『「育つ・学ぶ」の社会史』藤原書店
- 中村牧子 2018『著名人輩出の地域差と中等教育機会—「日本近現代人物履歴事典」を読む』関西学院大学出版会
- 沢山美果子 1990「教育家族の誕生」『〈教育〉—誕生と終焉』藤原書店, 108-131頁
- 多賀太 2014「近代日本における家庭教育の担い手に関する一考察—『私の履歴書 経済人』からの抽出事例を用いて—」『関西大学文学論集』64(3), 27-54頁
- 多賀太・山口季音 2016「近代日本における家族の教育戦略に関する一考察—旧中間層と新中間層の比較を中心に—」『関西大学文学論集』65(3・4), 135-163頁
- 多賀太 2018「近代日本の文化人にとっての家庭教育と学校教育に関する基礎的考察—『私の履歴書』からの抽出事例をもとに—」2018年関西大学教育学会大会発表
- 多賀太 2019「近代日本における家族の教育戦略に関する考察—大正期生まれの文化人を中心に—」日本教育社学会第71回大会発表
- 竹内洋 1999『学歴貴族の栄光と挫折』中央公論社
- 山内乾史 1995『文芸エリートの研究—その社会的構成と高等教育』有精堂

近代日本の文化人輩出過程に関する考察（1）  
—大正期生まれ伝統芸能家における家庭環境と学校教育の影響—（多賀）

**謝 辞**

本研究は科研費（18K02429, 17H02679）の助成を受けたものである。